

# ほなない歴史通信

第49号  
2008.12.1

## 大子の森を守ろう

自然を守ろうという運動は世界的に盛んに行われているが、効果的に実行されている例は少ない。

イギリスのナショナルトラスト運動は有名である。この団体は一八九五年に設立された自然保護や歴史的建造物の保存が主な目的の民間団体である。

会員数三五〇万人の会費や寄付金などで、自然地域や文化的遺産の買い取り、或いは寄贈、遺贈により入手、保護・管理に当たっている。例えばシェークスピアやその妻の生家も元のままに保存されている。入場料を払えば誰でも見学できるが、案内や管理はトラスト運動の会員で、多くは年寄りの婦人が当たっていた。

この運動の特徴は「絶対に政府の傘下に入ってはならない。」と言う事だそう。つまり国から補助金をもらうと色々な制約が生じ、思う様な運営が出来なくなるからである。

また自然保護活動は出来るだけ人工の手を加えないことがたいせつである。

日本ではかつてブナなどの自然林を伐採して、杉・檜

の植林を奨励した。国有林も民有林も競って植林した結果、今では国有林でさえ膨大な維持費が支出できず放置する状態になった。民有林も山林業務に携わる技術者が少なくなり、多くの針葉樹林が手入れされず、山は荒れ果ててしまったところが少なくない。

最近、熊や猿、イノシシ等の獣が人家近くに現れて農作物に被害を与える様子が報道される様になったが、この原因のひとつが自然林の減少にあると言われる。

ブナを始めドングリや栗、樫などの木の実がなる樹木が伐採されて山の動物の餌がなくなり、人里に姿を現す様になってきたのである。これらの獣は射殺されてしまうものも多い。日本のツキノワグマも絶滅の危機に瀕していると言われている。

この危機からツキノワグマを救おうと立ち上がった「日本熊森協会」という団体がある。この運動は針葉樹林を伐採して熊の住める自然林に戻そうというのである。兵庫県の中学校の一教師の発案で始まり、生徒達が運動を広げ、既にトラスト地として一三〇〇ヘクタールほどの森林を買い取り管理している。勿論国からは一銭の補助金も貰っていない。

大子にはかつて八溝山を中心に豊かなブナ等の自然林があったが、今では広葉樹林は針葉樹林の増加に伴い減少している。まして巨木と言われる木は少なくなった。

イギリスのトラスト運動ほどでなくても、動物が住める広葉樹林を育てる運動を全国的に広げたいものだ。

町の木がブナの「大子町」が全国に先駆けて実施してはどうかだろう。(熊森協会についてはサインズ一〇月号より)(石井)

# 茶味内の不動様と絆纏地蔵の盆踊り

昔はこの集落でも夏になると盆踊りがあった。中郷だけでもシモから前ノ内の大雲寺境内での観音様での盆踊り、北ノ内に来てお薬師様での盆踊り、茶味内の絆纏地蔵様の盆踊りと、お不動様での盆踊り、権現堂の地蔵講の盆踊りと五つもあった。娯楽のない時代の唯一の楽しみで、若い人らは一日の仕事が終わって一風呂浴びてから遊びかたがた集まった。

茶味内のお不動様は、俗にウルシボ（うるし坊）と云われる山伏、龍宝院の屋敷跡にある。嘉永六年（一八五四）に太神宮山に伊勢皇太神宮遙拝所を、旗針山に神武天皇御陵遙拝所を設置した幕末の尊皇の志士田村賢孝先生の旧居跡でもある。

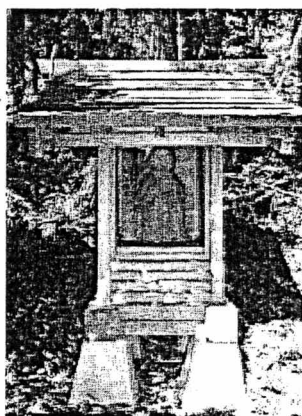
平成三年五月改築のお堂に祀られた木像の不動明王は、かなり古代の作で岩座から火焰光まで高さ七十七センチ、右手には悪魔を断ち切る宝剣を左手には悪魔をしげる綱索（けんさく）を持つている。不動明王の脇には流造の社殿の御輿（みこし）が置いてあった。地元、セトヤマの佐藤誠さんの話だと「縁日にはお賽銭をあげ



オコワをもらいお神酒をあげてウルシボの庭で盆踊りをやった」という。ここで盆踊りをやったのは終戦の頃までだそう。ここに珍しい左巻きの櫃（かま）があり河川工事でも勿体無いので切らずに残したという。茶味内の絆纏地蔵はセトヤマの佐藤誠さん宅の裏山にあ

る。お盆が過ぎて涼しくなつて絆纏を着る頃の旧の八月十六日、お見の次の日が縁日なので「絆纏地蔵」と云われている。

佐藤さんの案内で自宅裏山の地蔵堂へ登る。三十七センチ程の小さい石の地蔵さんで流造の木造小祠の中に赤い絆纏を着て入っていた。佐藤さんは一枚の棟札を取り出した。それには『奉修地蔵尊



安産折攸□□、明治廿四年辛卯年旧八月十六日、佐藤ちゑ、立之」とある。

佐藤さんによると「四代前のお祖母さんのちゑがトリアゲ婆さんをやっていた時に、安産祈願に地蔵様を立てた。縁日にはお地蔵様を家の中さ下ろして飾って、庭で踊りをやった。お賽銭をあげに来た。踊りは私が生まなうちからやっていたようだ。茗荷や内川、上野宮の方からも大勢来て太鼓はたいてやった。下町の義輝さんやアサやんが夜店を出した。義輝さんは早いうちから来ていた。庭は踊りでいっぱいなので下の道の脇でアキネエはやった。終戦後は下の十文字の所にヤグラを立てて二年ぐらい続けてやったのが最後だった。今でも旧の八月十六日にお祭りしていて近間の人らがお地蔵様にお参りに来る」という。

上町の飯村谷衛門さんは「十八、九の頃、夏は北デイラの十九夜様の盆踊りに行き、夏が終わって絆纏を着るセツになると中郷の絆纏地蔵に行った」という。佐藤誠さんも「若い時、山道通って奥州の伊香の米山薬師の盆踊りまで二度も行った」という。

（飯村尋道）

## 新聞記事にみる満州移民の断片(二)

―第九次冷家店大子町開拓団の軌跡―

かつて茨城県は、満州移民送出の拠点であった。その象徴的な施設が、昭和十三年三月に開設された満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所である。一六歳から一九歳までの青少年がここで訓練を受け、満洲に渡った。二十年八月の敗戦までの八年間に、訓練を経て渡満した青少年は八万六五三〇人に上ったという。

そうした拠点施設をもつ茨城県は、しかし、満洲移民には消極的であった。例えば、満州移民送出数を昭和五年の人口で割った満州移民率を四七都道府県別に比較すると、茨城県は〇・二四%で第三七位、東京、千葉、神奈川、埼玉とともに低位グループを構成している(「満州移民」の歴史社会学)。また、十二年に行われた東茨城郡、西茨城郡、新治郡、行方郡の村長以下農村諸団体の幹部に対する満州移民の必要性についての意見聴取の結果によると、五〇%が消極的であり、「国策として大々的に展開される中で、村幹部においてさえ移民は不人気であった」といわれる(茨城県史 近現代編)。

その茨城県にあって、積極的に分村移民を推進し、実現した数少ない例が旧大子町であった。だが、満州移民関係の資料を欠くために分村移民の立案、移民、満州での開拓生活、混乱の中での引揚げ、そして戦後の開拓に至る一連の過程は未だ詳らかにしえないままである。そこで断片的ではあるが、主に「いはらき」新聞資料(昭和十七年二月からは茨城新聞)を手掛かりにして多少なりとも空白部分を埋めていきたいと思う。

第一回目の本稿では、分村移民計画の決定に焦点を当ててみたい。分村移民という入植方式は、満州移民事業が本格化した昭和十三年五月に決定された。「大量の集団移民を計画的かつ組

織的に送出し、かつ国内(内地)農村の経済更生を図るための方策として企画されたものである(「満州移民」の歴史社会学)。茨城県がこの方式の実現にどのように取り組んだのかは定かでないが、茨城県経済更生委員会の指定町村である一〇カ村からなる満洲分村計画協議会が十四年十一月八日に開催予定であることが伝えられている(十四年十一月三十一日付)。この会合は、「県従来の懸案たる一部落三十戸以上分村の実を積極的に進出せしめんための具体的決定に関する協議会」と位置づけられた。また同記事には、「経済更生の桜井技師」なる人物の次のようなコメントが掲載されている。曰く、「これは従来職業課でやつておりますのとは根本的に違ふのです。つまり今までのやうに二人でも三人でも希望者があればそれで渡満せしめると云ふのではなく、経済更生の指定町村から一部落三十戸以上を集团的に分村せしめる計画で本年は未だ第二回目ですから五十名と云ふ少数ですが、来年(十五年)度はずつと多く二百五十名から三百名位を送りたい」と。従来方式との違いや県の意気込みが読みとれよう。協議会のメンバーである一〇カ村には、大子町域では黒沢村が含まれていた。

その動きに前後して、大子町でも分村計画が具体化する。昭和十四年十一月三日、大子町経済更生委員会は三〇〇戸をもつて「大陸の新天地」へ集団移民することを満場一致で議決した。分村計画樹立町村の指定を受けておらず、また何らの指導も受けていなかった大子町でのこの取り組みを、「いはらき」新聞は「論壇」で高く評価している。「本県が日本唯一の拓土訓練所を持つにも拘らず、県民の大陸への認識は未だに浅薄の誹を免れず、拓土送出奨励の宣伝も隔靴搔痒の感があつたのであるが、大子町の三百戸集団移民計画の決定をきくに至れるは：まことに悦びに堪へない」、「時節柄愉快なニュースとして吾等の心を強く打つものがある」(十四年二月八日付)。(齋藤)

## 昭和三十三年西金小学校・袋田小学校の改築について

昭和三十四年（一九五九）三月一日の広報だいが（大子町役場発行）には、「昭和三十三年度の小学校卒業生は十八校一〇二三名、中学校卒業生は八校一〇五九名であり、大子一高の卒業生は二六四名、大子二高は二一七名とある。」ところが、平成二十年度（二〇〇八）の町内五校の中学三年生は一八八名で、五分の一に減少している。昭和三〇年代の高度経済成長以来、社会が急激に変化しているのがわかるが、ここでは今から五〇年前の大子町の様子を「広報だいが」から紹介しよう。

昭和三十年の町村合併によって、新たに大子町が発足する。大子町教育委員会の管轄する学校の児童、生徒数は「大子中七五三 依上三四〇 袋田二六四 官川三四七 黒沢四〇八 佐原二四九 上小川三九六 生瀬三八〇」の八中学校で計三一三七名である。小学校は、「大子九一五 上岡二三四 浅川一九九 依上五七四 池田一二五 袋田四八三 矢田二四二 下野宮三九〇 黒沢五二〇 上野宮二二六 佐原五三〇 上小川五七一 大沢二一八 内大野三八〇 小生瀬四一八 下小川二五七」の十六小学校で計六二八二名である。

生徒数が急増する中で、昭和三十二年度に、西金小学校・袋田小学校・内大野小学校が改築された。当時の小学生は、昭和二十年から戦後の昭和二十五年に生まれた児童である。

西金小学校校舎が完成して、四月十一日、来賓多数を迎え盛大に竣工式が行われた。「当日は地元協賛会の招きによって勝田自衛隊が来町、会場で演奏を行い、多大の感銘を与えた。午後三時から大子町役場前で祝賀演奏、続いて町内を行進した。

・・・西金小学校（元下小川小学校）は明治二十四年の創立で、その後運動場拡張事業のため大正二年、同十年、昭和八年の3

回にわたって現在の位置まで約三〇メートル移動した。その移転のため土台や柱が腐朽甚だしかったのである。「建築を僅か一カ年で行ったことは、希望にもえて合併した新しい町づくりの効果の現れで地元民の感激も一入深いものと思われ」という。

昭和三十三年、新年の挨拶で、菊池俊雄教育長は、学校の数は、小、中学校合せ本校二七校、分教場六校を有し、生徒数九五二九名、学級数二三八、職員三〇五名。現在、教室の整備、校舎の増改築が課題です。さらに学校の統合、廃止問題があります。これは、八学級以下の小規模校と、通学距離、小学校は四キロ、中学校は六キロ以内として学校を廃止統合する計画であると述べる。

袋田小学校新築工事は、昭和三十三年九月に着工、翌昭和三十三年五月、竣工式を挙げる。「当日（五月九日）は、初夏にふさわしい好天気で、地元協力会の方々の準備万端ととのう中に、午前十一時半から開式（岡村収入役）の挨拶あって国旗掲揚、工事経過報告（塚田助役）ついで町長から工事請負人大森昭三郎、安田俊蔵、協力会長菊池昇の三氏へ感謝状、記念品を贈呈。会長から桜岡敬次氏へ感謝状を贈って八代町長の式辞、来賓祝辞（知事代理塩畑大子支所長、今泉郡教育出張所長、飯村、神永両県議、鴨志田議長、大藤教育委員長、根本学校長代表）、謝辞（大森、安田両氏、斎藤校長、児童代表）、閉式のことは（野内協力会副会長）があつて式を閉じた。式後、祝宴があり、校庭では東京演芸団の歌や踊りで終日にぎわいを呈した。「鯉のぼり 学び舎もまた あたらしく」の祝電がよせられた。

あれから五〇年、現在、各市町村は、生徒減少に対応した学

校づくりを迫られているのである。（野内）

## じゅうおうえん信仰 (二)

〜大子町上金沢地区〜

上金沢地区の橋場、荒屋、鎮ケ内、天神平、高内・清水の各坪でじゅうおうえん信仰(講)を行うときは、部屋に十二幅の掛け軸が掛けられる。その掛け軸の絵図をみると、地獄の閻魔大王をはじめとする九人の王(十王)が亡者の(死者)生前の所業を審査し、裁いた地獄絵図が十幅、抜苦や福德に利益のある諸仏や菩薩で構成されている十三仏の掛け軸が一幅、冥界(地獄)の守護神に位置づけられた地藏菩薩の掛け軸が一幅、計十二幅ある。本稿では閻魔大王を中心に、九人の王が亡者の生前の所業を審査して裁いた主な掛け軸の絵図について、その一部を紹介する。

○秦広王：王の裁きを受け、鬼に棒叩きされる恐怖と苦しみから王に命乞いをしたり、鬼に追いたてられながら火の山や針の山を登っているむごたらしい女の姿が描かれている。

○泰山王：王の裁きを受け、鬼に鉄棒で頭を叩かれる。額に釘を打たれる。嘆き叫びながら手をあわせ、命乞いをしている女のむごい姿が描かれている。

○初江王：王の裁きを受け、鬼に髪の毛をつかまれて棒叩きにされようとしている女や恐ろしい形相をした脱衣婆に着物を剥ぎ取られ、裸体姿の男女のむごたらしい姿が描かれている。



○宗帝王：王の裁きを受けた亡者が鬼に胴体を食いつかれ、血でおおわれた女、鬼に追いたてられ針の山をよじ登る男、胴体を刃物でまっぶたつに切られようとしている女のむごい姿が描かれている。

○閻魔王：地獄の支配者閻魔大王である。大王の前にある鏡には生前の悪行が映し出されている。鬼に追いたてられながら命乞いをする男女、臼に入れられ、杵でつかれて血を流している男女、人間を食べようとしている鬼、「命ばかりはお助け下さい」と、両手を合わす男女のむごい姿が描かれている。

○五冠王：王の裁きを受け、天秤はかりの中軸にさせられる女。釘ぬきのようなもので舌を抜かれ、血を滴らせている女。両足を広げられ、体を逆さにつるされて鋸で股切り



以上述べてきたように、人は死ぬと、まず冥土の十人の王によって生前犯した罪の裁きを受け、その程度に応じて地獄に堕ちて行く。上金沢地区のじゅうおうえん講は、約三百年の長きにわたって続けられてきている。地獄に堕ちたもののむごい責めの苦しみからの極楽浄土への救済という目的は長い間に薄れてきているが、地区の人たちが先祖を敬い、追善供養するという念仏仏事は変わっていない。(小澤)

【ふんやう写真帖】

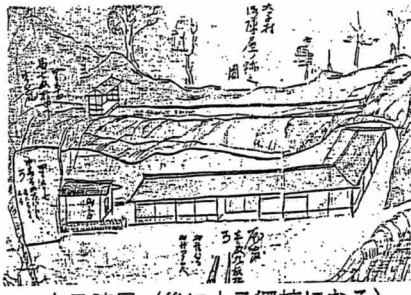
天狗党の宿营地となった大子

元治元年（一八六四）三月二十七日、藤田小四郎、町奉行田丸稻之衛門を中心とする天狗党は、尊皇攘夷の実行を求めて筑波山に兵を挙げた。

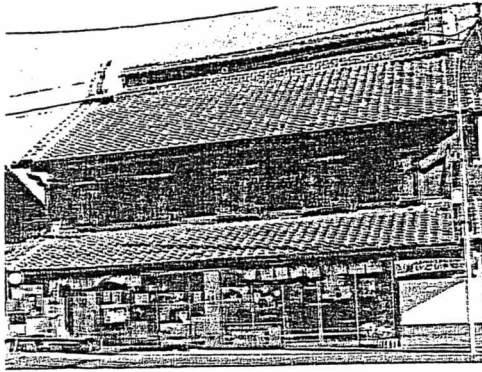
諸生党は、天狗党の暴挙を上京して、徳川慶喜に伝え、市川三左衛門を中心に幕府軍とともに追討に乗り出した。天狗党は、戦いに不利なところから筑波山をおり、那珂湊において戦いを交えた。しかし、勝ち目なく、大宮町を経て県北に向かった。途中、諸生党が待ち受ける道坂峠（太郎山の西側）、や瀬戸田（大子町内）等で交戦し、町の中心街に進入した。その時の本陣となったのが近江屋（現レトロ館）である。

天狗党は、本陣において軍議を開き、隊を再編成し、十一月一日武田耕雲斎を総大将として、西上の途についた。

宿営となった郷校と近江屋



大子陣屋（後に大子郷校になる）



近江屋（現レトロ館）

編集 後記

去る、九月二十八日（日）「ふるさと歴史講座現地巡り」を開催いたしました。当日は天候に恵まれ、講師の小澤先生、斎藤先生、石井先生、野内先生の四人の先生方と、参加者十九名で大子町立中央公民館をバスで出発いたしました。参加者の中には、将来社会科の先生になりたいという十代の方もおり、今のうちからそのために故郷の歴史を知っておきたいという話を聞いて感心いたしました。

さて、今回は「なす地方における光圀ゆかりの歴史と文化」をめぐるコースで、御前岩、健武山神社、馬頭院、栃木県立なす風土記の丘、下侍塚古墳、笠石神社を歩きましたが、その当時水戸光圀公がいかに「なす地方に」かわりを持っていかを先生方の説明により知ることができました。歴史は面白いものですよ。みなさんも是非参加してください。

（佐藤治身）

編集人

斎藤 典生（茨城大学人文学部）

野内 正美（茨城県立日立商業高校）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圀彦（元 教員）

佐藤 治身（大子町教育委員会）

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室気付

久慈郡大子町池田二六六九番地

〒319-3551 ☎0295(72) 2627